Osaka University Knowledge Archive

Title	オランダの英語教育は日本に取り入れられるか
Author(s)	飯久保, 遥香
Citation	平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2017
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60346
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

申請先学部　外国語学部
採択番号　　No.　1

平成２８年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	飯久保　遥香	学部 学科	外国語学部 外国語学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者名		学部 学科		学年	年
					年
アドバイザー教員 氏名	田村　幸誠	所属	言語文化研究科		
研究課題名	オランダの英語教育は日本に取り入れられるか				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

１）研究目的

１．１着想に至った経緯

日本人の英語運用能力は世界基準でみると先進国と比べても非常に低く、グローバル社会において現在の地位を保つためにも英語教育を改善し、日本人の実践的な英語運用能力を底上げする必要がある。日本では現代のグローバル社会における英語の必要性と、日本の英語教育の改善が叫ばれて久しく、ALT の導入や義務教育における英語の授業の開始時期の早期化など、改善が図られてはきた。しかしながら、世界的に見ても日本人の英語運用能力はまだまだ低い。スウェーデンに本社を置き、世界的に知られる留学会社である EF（Education First）が２０１６年に行った、非英語圏の国別の英語運用能力の指数を測る調査によれば、日本は調査国７２か国中３５位と他の先進国と比べても下位に位置している。また、２０１３年の TOEFL の点数の世界ランキングでは１１５か国中１０４位という結果に終わっている。このような指数は実際の英語運用能力を直接反映しているとはいいがたいが、日本の英語教育には改善の余地が大いにあることを示唆している。

一方で、英語を母語としない国の中でオランダは極めて英語力が高いことがうかがえる。上記の EF による調査では１位、TOEFL の点数でも１位となっている。また、英語でコミュニケーションをとることができる人口の割合は EU の中でも最も高い９０％である（Europeans and Their Languages, 2012）。近年、フィンランドなどの北欧諸国とともにオランダの早期教育とその質の高さが注目されているが、オランダ人の全体的な英語力が日本だけでなく他の欧州諸国を抜いてこれほどまでに高いことに非常に興味を持った。

１．２．何をどこまで明らかにしようとしたか

一般的には言語構造や民族的な類似性、また国家の経済力が国民の英語運用能力を左右していると考えられがちであるが、そのような考えは非常に安易であるように思われる。オランダ語に英語と似た響きをもつ単語が一定数あることは確かだが、文法となると、例えば過去形や現在完了形といった

比較的高次の文法では文構造がかなり異なることも事実である。また、同じゲルマン語族に属するドイツ語圏の国の英語レベルは EF による指数では９位となっている。さらに、オランダには放課後に学習塾に通う、ということがないため、英語の学習時間は日本人の生徒よりも少ないはずである。このことから、私は、オランダ人の英語運用能力の高さは言語的、民族的な近さ以外の面、具体的には個々の英語の習得過程や教育の面で決定的な違いがあるはずだと考えた。本研究ではオランダでの義務教育期間に行われている英語教育のなかでどのような要素を日本の英語教育に取り入れることができるか明らかにしたい。

１．３．本研究の特色

本研究では、オランダの小中学校で何を目標としてどのように英語教育が展開されているか、を調査する。その際、授業環境、授業・課題内容と、生徒の英語学習に対する態度の３点に焦点をあて、オランダの英語教育を質と量の両面から分析する。さらに、現在の日本の英語教育と比較・考察し、日本人の文化や国民性、日本社会も考慮したうえで生徒が主体的に学べるような、日本における英語教育の改善に向けての指針を提案する。

１．４．予想された結果と意義

　オランダと日本では国を取り巻く環境や経済力、公用語と英語との言語的な性質の違いなどがあり、オランダの英語教育をそのまま日本に取り入れてオランダで得られたような結果を得ることは難しいであろう。しかしながら、英語教育を行うにあたってどのような環境で学ばせるか、教師や生徒がどのような考えをもって授業に臨むか、いかに効率よく英語を習得させるか、といったような考え方や方針の面では英語力の高いオランダの教育から大いに啓発をうけることができるはずである。

２）研究計画

調査は第一セメスターと夏休みを使い、文献調査と学校訪問での授業見学、教師へのインタビュー、生徒へのアンケートによって行う。第二セメスターには調査結果をもとに分析・考察を行い、報告書を作成する。

３）研究方法

文献調査に加え、実際にオランダの小中学校各２校を訪れ、英語教育に関する教師へのインタビューと英語学習と英語への意識に関する生徒へのアンケートを行った。なお、対象としたのは１０～１２歳の小学生５０名と１３～１５歳の中学生１７２名である。さらに、母校にも協力を依頼し、日本の１３～１５歳の中学生１０７名に同様のアンケート調査を行った。

４）研究経過

４．１．オランダの英語教育の概要

オランダの英語教育の開始時期は学校によってさまざまであるのが現状であるが、早い学校では５歳から、遅くとも９～１０歳には開始される。今回訪問した小学校ではどちらも９歳から英語の授業が行われていた。小学校においては週に１回、中学校においては週に２～３回の英語の授業が行われる。オランダでは英語運用能力の指標として CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を採用しており、義務教育課程における英語運用能力の到達目標は、中学３年生で B1

（「仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。 その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。」）レベルとしている。高校卒業条件となる全国共通試験(CE)の問題は読解のみに偏っているが、学校における定期テスト、卒業前の校内試験(SE)では４技能が均等に評価される。

４．２．授業環境・内容

オランダの小中学校の英語の授業では、生徒が４技能においてバランスよく主体的に学ぶための雰囲気と時間、課題がしっかりと確保されている。教室内の机の並び方はさまざまであったが、４～５人分の机を一つに固めてグループ学習を促す並べ方をしている授業が多くみられた。これによって、生徒同士や教師と生徒の物理的・心理的距離が近くなり、生徒同士の教え合いや教師への質問がしやすくなっている印象を受けた。

さらに、授業時間の６割以上は生徒が自主的に学習する時間に充てられている。５０分の授業時間のうち、テキストの文章を読み、文法の説明を説明する時間は１５分程度で終わり、残りの時間は教師が教室内を回り、生徒が各々授業で習ったことを即実践に移すことに充てられる。その内容は、テキストの内容理解を問う問題や文法問題、作文、プレゼンテーションの準備など、さまざまであるが、生徒の技量に応じて、できるだけ多くの経験と気づきによる習得を促している。このように授業の中で生徒の自主学習の時間が長く取れることは、ICT の活用とテキストの全文翻訳をしないことによる恩恵であるといえる。オランダの学校ではすべての教室で ICT 機器を用いて授業が行われており、教師が板書をする時間が削減されている。また、テキストの内容理解を問う際、日本ではたいていの場合多くの時間を要する全文翻訳が行われるが、オランダの英語の授業では英語をできるだけ英語のまま理解することが重視されている。そのため、特に中学校では文章のオランダ語翻訳は行われておらず、エクササイズの一環として、英語で段階的に正誤問題や内容確認のための選択問題を解くことによって文章の理解を確認する。

４．３．教員の意識

多くのオランダ人英語教員は、概して生徒の暗黙的学習を意識して指導を行っている。英語運用能力の基礎となる語彙力の拡大を図り、大量のインプットにより自ら気づくことで英語の感覚を感じとってもらうために中学１年の段階から生徒それぞれのレベルに合った絵本や小説を読書課題として取り入れている。教員は共通して、生徒が自信を持つことが言語習得において非常に重要であると認識しており、授業内では、学ぶために積極的に英語を使い、間違えることを促し、生徒が質問や発言をしやすい教室の雰囲気づくりを心掛けている。生徒のモチベーションを向上させ、アウトプットを促すために、積極的にゲーム感覚でできるアクティビティーを取り入れている。そして英語を英語で理解することの習慣づけを早い時期から生徒に教えており、新しい語句の意味の英語での説明、英語でテキストの概要を述べる練習も積極的に行っている。

４．４．生徒の英語学習に対する意識

オランダ人と日本人の生徒を対象に行ったアンケートから、英語学習に対するモチベーション、自主学習の質、英語の実用に対する意識の３点について特に大きな差がみられた。①なぜ英語を勉強したいか、という問いに対して、オランダ人では「外国の人と話してみたいから（６６％）」「将来（進学・

就職）のため（１６％）」という知的好奇心からの学習意欲があるとうかがえる答えが多かったのに対し、日本人では「将来のため（３６％）」「義務だから（３１％）」という答えが順に多く、比較的英語学習に消極的であるといえる。②次に、学校以外での英語学習の機会について、オランダ人では「テレビや映画、動画サイトなどのメディア（４５％）」、「ゲーム・アプリ（２８％）」をはじめ、本やネットの記事など様々な媒体から英語を吸収しているのに対し、日本人では「宿題（３４％）」「塾（３０％）」と続き、学習用テキストからの吸収のみに限られてしまい、ほとんどの生徒が多様な英語に触れられていない。③さらに、外国人と話すことに対する意識とその理由について、オランダ人では「楽しい（５０％）・勉強になるから（１８％）」「楽しい・英語が好きだから（８％）」と、英語を使うことに対して積極的な回答が続いたが、日本人では「難しい（３５％）・うまく話せないから（１９％）」「不安（１３％）・うまく話せないから（８％）」と続き、英語を使うことに抵抗を感じる傾向にあることがわかる。しかしながら、これに関して、英語の授業が楽しいと答えた日本人の生徒の半数以上が、その理由として「授業のアクティビティーが楽しいから」と答えている。このことから、アクティビティーにおいて、より実際の会話に近い実践練習ができれば授業から実際の場面への応用がしやすくなり、英語を話すことへの抵抗を減らすことができるのではないかと考える。

５）研究成果

以上のことから、日本がオランダの教育から学べる要素は多くある。そのなかで、義務教育期間におけるオランダと日本の英語教育の決定的な違いは、生徒が授業や家庭学習において主体的に学習する習慣がついているか否かにあるといえる。ここにおける「主体的学習」について、「生徒が実践を機会に考え、時には失敗をしながら自ら気づくことで得る学び」と定義する。オランダでは概して、授業内で生徒が習ったことを即実践し、間違いや失敗を通して自ら気づき、そこから学びを得るという経験が豊富にできている。しかしながら、改善が進んではいるものの、日本の英語の授業の中ではこのような環境が整っているとはいいがたい。また、家庭学習においては、オランダの生徒たちは学校の学習用テキストからのみではなく、インターネット上の記事や動画、テレビや本、ゲームなど、実に様々な媒体から英語を吸収している。使う場面についても旅行やゲームをはじめ、日本人の生徒に比べて機会が豊富で、これが大いに英語学習に不可欠なモチベーションとなっている。このことから、生徒の主体的学習の充実を目指して日本の英語教育の改善を図る必要があると考える。本研究では、生徒の英語学習への動機づけ、教科書の内容理解の過程、生徒が習ったことを実践するアクティビティーの３点からさらに具体的な提案を試みたい。

まず、英語学習への動機づけについて、生徒は、コミュニケーションツールとしての英語は多様であり、身近でありながら将来の様々な可能性を導いてくれるものであることを認識する必要がある。そのために、教科書だけではなく、インターネット上の記事や動画などを授業や家庭学習用として積極的に活用することを提案する。生徒の主体的な学習を支える要素として、英語学習に対するモチベーションが果たす役割は大きい。しかしながら、多くの日本人の生徒のように英語を身近に感じる機会がなければ学習意欲につながりにくい。例えば、他の国の英語学習者が話す英語を聞くことが生徒の英語を学ぶモチベーションにつながるかもしれない。生徒に様々な英語に触れる機会を与え、彼らが英語で触れられる情報の範囲を広げることが英語を学ぶ動機を形成するためには重要ではないだろうか。

次に、教科書の内容理解について、エクササイズの一環として、この確認を極力英語で行うことを提案する。現在日本では多くの英語の授業で全文の翻訳を文章の内容理解の確認として行っている。しかし、全文の翻訳をすると生徒が受動的に授業を受ける時間が長くなる上に、文章の内容理解は翻訳だけで測れるとはいいがたい。英語の文章を読んで英語でかみ砕いて理解ができるようになれば、その能力のほうが実際に英語でコミュニケーションを行う場合には役に立つであろう。確かに、新出単語や新しい文法の説明は多少母語の補助が必要であることは否めない。それでも、日本語による説明はキーセンテンスのみにとどめ、その他の部分の理解は段階的に英語の正誤問題やテキストの内容の選択問題を解いていくことで生徒が主体的に英語で考え、理解する力そして推測する力を養うことができるのではないだろうか。

最後にアクティビティーに関して、生徒にとって実際の会話の感覚をつかむ練習となるアクティビティーを提案する。それは、ある一定の時間を決め、その間はペアのパートナーと定められたトピックについての会話を続ける、スピーキングマラソンというものである。授業で学習した文法や単語を使ってできる表現とその表現が使えるシチュエーションを生徒に伝え、会話の軸となる表現を覚えてもらう。その後、シチュエーションに基づいて時間いっぱい会話を続ける。２０１２年、千葉県の公立高校で行われた調査では、約半年間のスピーキングマラソンの実施の結果、対象者の４６．２％が「英語を話すことに自信がついた」と答え、６３．２％が「英語を話す抵抗感が少なくなった」と回答している。このことから、多くの日本人の生徒は英語を話すことに抵抗があることがアンケートから読み取れたが、会話で使う表現やテーマといった話のつかみを事前に与えることで、そして話すことを習慣づけることで、より話すことへの敷居が低くなり、自信をもって発言できるようになるようだ。そのようにしてアウトプットの機会が増えることで考えたり失敗したりする経験ができ、より生徒の主体的学びが実現されるのではないかと考える。

現在、日本の小中学校のなかには先進的な取り組みをしている学校もある。そのようななかで、全国のより多くの生徒に学校の英語学習の中で少しでも多くの英語に触れ、実践の中で自ら気づきを得ることで学ぶ機会が与えられることで、日本の生徒たちが英語学習に意欲的になり、将来的にグローバル社会の中で日本を担う日本人の英語運用能力が底上げされることを期待する。

６）参考文献

１．EF English Proficiency Index（EF EPI）,2016
http://www.efjapan.co.jp/epi/
２．Europeans and their languages, 2012
http://ec.europa.eu/public_opinion/archives/ebs/ebs_386_en.pdf
３．「オランダの教育」リヒテルズ直子（２００４）
４．「オランダの個別教育はなぜ成功したのか」リヒテルズ直子（２００６）
５．「英語による発信力の向上を目指したスピーキングの指導― 質より量のスピーキング活動―」http://www.chiba-c.ed.jp/shidou/k-kenkyu/H24/gaikokugo-2.pdf
６．ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」と「高等教育機関で学ぶための英語力検定試験(Academic English Proficiency Tests)」
https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/pro-ee-lesson-level-cefr-jp.pdf